

鈴鹿工業高等専門学校創立 60 周年記念式典 校長式辞

鈴鹿工業高等専門学校創立 60 周年記念式典にあたり、教職員と在学生を代表してご挨拶申し上げます。本校は 1962 年に国立高専の一期校として創立されました。これまで輩出した卒業生、修了生は約一万人に及び、国内外の様々な分野で活躍しています。ひとえに歴代教職員、教育後援会、同窓会、地方自治体などのご支援の賜と感謝申し上げます。また卒業生の努力と活躍に敬意を表します。

さて、今年は高専制度創設 60 周年にもあたり、鈴鹿高専の歴史は高専の歴史と共にあります。そこで、先ず高専制度ができた経緯とその後の歩みを社会の変遷と共に振り返り、更に近年の鈴鹿高専に焦点をあて、今後を展望する足掛かりにしたいと思います。

時は戦前に遡(さかのぼ)ります。戦前の日本の高等教育には旧制の大学、高等学校、大学予科、師範学校、そして専門学校と様々な学校種がありました。中でも専門学校は工業以外にも医学、法学など様々な分野の実践的な高等教育を担っていました。しかし戦後の 1949 年、これらの旧制の高等教育機関は大半が新制大学に再編・統合されました。つまり今の大学の工学部、医学部、法学部などになった訳です。これは日本の高等教育制度の歴史上、極めてドラスティックなことでした。

ところで、日本の製造業は戦争で大打撃を受けましたが、1960 年代から驚異的な高度経済成長を遂げ、世界の奇跡と言われました。これには高専制度の創設が大きく関わっています。経済成長には大量生産型の工業を支える中堅技術者の養成が急務となり、戦前の専門学校のような実践的な高等教育機関が必要と産業界が国に訴えたのです。紆余曲折の結果 60 年前に創設されたのが 5 年制の高専です。当時は高校への進学率が 60%、大学への進学率は僅か 20%という時代でした。その後、社会の高学歴化を背景に、高専の卒業生を受け入れる技術科学大学が豊橋と長岡に、また高専に専攻科が設置されたことはご存じの通りです。

高専は日本の高度経済成長を支えたばかりでなく、日本独自の優れた高等教育機関として世界に認知されました。2006 年に OECD、経済協力開発機構が日本の高等教育を調査し、次のように報告しています。日本の高等教育には、有効な戦略計画の必要性が殆ど認識されていないという課題がある中で、唯一の例外が高専である。高専は国立高専機構によって効果的に運営され、質が高く革新的な高等教育機関であることを賞賛する、と高く評価されました。高専関係者にとって名誉な事でした。

一方で産業界の変化はどうだったでしょうか。約 30 年続いた日本の高度経済成長の後、デジタル化や各パーツのモジュール化による製品開発など、ものづくりの高度化が一変しました。その結果、従来の専門的技術力に強みを持っていた日本の製造業の多くが衰退し、日本製品の国際競争力が急激に低下したことは今でも日本の課題です。この背景で、国は 2008 年に高専の使命を従来の中堅技術者の養成から、より高度な技術者の育成に修正しました。具体的には、国際化した社会で活躍できる、創造性と実践性を持つ技術者の育成です。高専は時代に応じた教育の高度化を求められたのです。鈴鹿高専が掲げる「創造力豊かで国際社会に通用する技術者を育成」

は、このような社会要請に基づいています。

しかし、具体的にはどのような教育が求められているのでしょうか。従来の技術開発は主に専門技術の高度化でした。しかしイノベーションを起こす今日の技術開発は、様々な技術を融合して新しい価値を作る異分野融合型が主流になりました。世界を一変させた iPhone や iPad などが典型例とされますが、基礎研究でも専門の融合が重要と強調されています。この様な背景で、10 年前の 2012 年、折しも高専創設 50 周年の節目に、高専はものづくり日本の復活の基盤となる人材育成を表明しました。そしてそれを実現する教育の高度化の鍵は、幅広い分野の総合応用力を育成するエンジニアリング・デザイン教育としました。エンジニアリング・デザイン教育は今でこそ当たり前のように議論されますが、当時の日本でその重要性を認識して実行したのは極めて少数派だったと思います。

鈴鹿高専も教育の高度化に取り組んで来ました。例えば創造工学では 4 年生全員がチームに分かれ、予算や期間の制約の下で企画、設計、実装というものづくりの上流から下流の工程を体験します。全国高専の模範となるエンジニアリング・デザイン教育でしょう。

さて国は 2016 年に、AI やロボットなど様々な未来技術で全ての人が快適に暮らせる超スマート社会の構想を打ち出しました。狩猟、農耕、工業、そして情報の社会に続く人類の 5 番目の社会 Society5.0 です。高専は今その実現に向けて、「高専発! Society5.0 型未来技術人材育成」を推進しています。その柱の一つが Gear5.0 事業で、全国の高専が連携して高度な先端技術を社会実装する研究教育で、未来型の技術者を育成するのです。特にマテリアル部門では鈴鹿高専が中核拠点校として全国の高専を牽引しており、ここでも高専生の実践的能力が大きく期待されています。これらの新しい教育の効果は、学生達の卒業後の活躍で大きく花開くと信じています。

今日の社会は人類が経験したことがないスピードで変化しています。今後の展望にあたり、これまでの高専教育でよし、としてはいけません。視点を世界と未来に向けて高専自身が大きく変化する必要があります。

言うまでもなく高専の主役は学生の皆さんです。そのため 60 周年記念事業の準備では教職員に加えて 14 名の学生代表者に参加して頂きました。記念講演会では全炳河(ぜんへいが)様にご講演を頂きますが、学生達のアンケートに基づいてご依頼し、実現しました。ご講演後には学生達とのパネルディスカッションが行われます。学生の皆さんには自由な発想の議論を期待します。

最後に、この講演会とパネルディスカッションが今後の高専、そして鈴鹿高専を展望する良き機会になることを祈念して式辞とします。

令和 4 年 10 月 29 日

鈴鹿工業高等専門学校長 竹茂 求